支援のアイデア　Ⅱ

学校にはどの教室にも、授業に集中して取り組むことが難しい子どもや、基礎的な内容が定着しにくい子どもが見られます。中には、友だちとのトラブルが絶えない子どもや、理由がはっきりと分からないまま不登校になってしまう子どももいます。

このような子どもたちの中には、障がいのある子どもが含まれていることがあります。

発達障がい等のある生徒は、周囲の状況や対応の仕方によって、大きく状態が変化します。

目の前の支援の必要な子どもの実態を的確に把握し、できる支援から取り組み、どの子どもも安心して学び、楽しい学校生活を送ることができるようにしていただきたいと思います。

1　学習場面における支援

発達障がい等のある生徒は、視覚的、聴覚的な情報処理や記憶することの問題でつまずいていることがあるために、他の生徒にとっては何でもないことがとても難しい場合があります。「こんなこと」と思うようなことでも、少しの配慮と工夫で授業の集中が大きく変わることがあります。

視覚的、聴覚的な情報処理や記憶することに困難さがあると・・・

○　文章を読んだり、文字を書いたりすることが、他の生徒と同じようにできない。
○　教師の指示が、うまく伝わらない。授業中、ぼんやりしている。
○　教室の外から聞こえてくる音や窓から見える様子により、落ち着いて授業に参加できなくなる。

困難さを感じながら学習している生徒がいるのだから．．．

視覚的、聴覚的な処理が困難な生徒への支援例

視覚的な処理が困難な生徒への支援例

○　板書の文字は読みやすい大きさで丁寧に書き、色分けしたり、行間などを工夫する。
○　板書をする時には、書くだけでなく書いた事柄を読み上げる。
○　板書を書き写す時間を十分とる。
○　図やグラフは見せるだけでなく、言葉でも説明する。

聴覚的な処理が困難な生徒への支援例

○　１回で多くのことを指示するのではなく、１回で一つの内容とする。
○　複雑な課題や作業は、手順を書いて示す。
○　説明する時には、生徒に口の動きを見せて注目させる。
○　口頭での説明が理解できたか確認する。

他のことはできるのに、「どうして、こんなことができないんだ」「やる気がないのか」と、いらだちを感じる教職員もいると思います。
しかし、「できないこと」へのいらだちは、本人が一番強く感じていることです。強く叱ってプライドを傷つけるより、できない原因を考え、生徒に分かりやすい授業を心掛けることが大切です。

生徒のできたことや改善が見られたことはほめ、生徒の得意とすることやできることを手がかりとして指導を工夫することで、自信をもたせることが大切です。

2　不適切な行動を予防するための対応

発達障がい等のある生徒は、不適切な行動をとったりすることがあります。
なぜ、そんな行動をとったのか、その原因を考え、原因に合わせた予防的な対応を行うことで不適切な行動を減らすことができるようになります。

不適切な行動の原因として考えられること

【例】○　何をするべきなのかが分かっていなかった。
○　相手の意図を勘違いしていた。
○　感情のコントロールができなかった。

行動の原因を知るためには、記録が重要です。
その行動の前後の様子も記録すると原因が分かりやすくなります。

不適切な行動の原因が分かったら．．．

不適切な行動を予防するためのポイント

○　生徒が見通しをもつことができない場合の支援

・　日程や手順の変更や初めて体験する行事があった場合、その理由や内容が分からないことなどが原因で不安感が増し、不適切な行動をとることがあります。生徒が見通しをもって活動できるように、前もって日程や手順、行事の内容を説明しておくことが大切です。全体への説明だけで分かりにくい場合は、個別の説明も必要です。

○　意図が伝わらない場合の支援

・　説明や指示をした時に、話し手の意図とは違う意味に受け取ることがあります。話をする時には、主語や目的語を省かず具体的に指示をしたり、皮肉や冗談を含む表現を避けたりする配慮が必要です。

○　感情のコントロールが難しい場合の支援

・　自分の中にわいてきた怒りや不安などの感情を言葉で表現できず、大声を出してしまったり、乱暴な態度をとってしまうことがあります。こうなる前に、深呼吸する、身体を動かす、その場を離れるなど自分に合った方法で気持ちを落ち着かせることを教えておくことが大切です。

失敗の経験と叱責が続くと自尊感情（自己肯定感）が低くなり、不安や人間不信が募り、反抗的な態度をとることがあります。簡単なことでも、できたことをほめることが大切です。また、教師によって対応が異なると、生徒は混乱します。
一貫した指導が大切です。

一度壊れた人間関係は、どんなに努力しても修復は困難です。何事も最初のラポートづくりが大切です。

3　不適切な行動をとった時の対応

発達障がい等のある生徒が不適切な行動をとった時は、生徒の特性を考慮した対応が効果的です。適切なルールや行動の取り方を具体的に教えることで、生徒の行動が改善されます。

不適切な行動をとる生徒の特性

【例】○　ものごとの因果関係を理解したり、その場の状況を把握することが苦手である。
　　○　常識や暗黙の了解事項が分かりにくい。
　　○　自分の気持ちや考えを適切な言葉で表現することが苦手である。

特性を考えると．．．

不適切な行動をとった時のポイント

○　共感的な態度で接する。

・　不適切な行動をとることになった原因を、言葉を補いながら、生徒とともに振り返り整理する。
【例】「どうしてこういうことになったか、一緒に考えてみよう。」

・　考える際には、話すだけではなく、図示したり文章に表したりして、相手と自分との関係が見えるようにする。

・　避けたい対応として、「またやったのか！何回言ったら分かるんだ。！」といった一方的な叱責は、生徒の自尊感情を傷つけ、不登校やフラッシュバック等の二次的な障がいの原因にもなります。

○　常識的なルールと具体的な行動を教える。

・　気持ちは理解できるが、行動は間違っていることをはっきりと示す。
【例】「君の腹が立った気持ちはよく分かるよ。」
　　「でも、○○○をすることは絶対に許されないことです。」

・　「いつものことだから．．。」と注意しないでおくと、生徒は不適切な行動をとっても許されることを学習し、また同じ行動を繰り返します。すべての行動を許容することは、ルールのない状況を作ることになってしまいます。

・　具体的にどのような行動をとるべきかを指導する。
【例】「今度からは、どう行動すればいいのか、一緒に考えてみよう。」

・　「次からは、きちんとしてください。」という言い方では、生徒は何をどうすればよいかが分からず、行動の改善にはつながりません。

・　基本的な会話の仕方など、当たり前と思えるような基本的なやりとりを教える。
（ソーシャルスキルの指導）

どうしてトラブルになったのか、どう対応すればよかったのか、一緒に考えながら自己受容（気付き）をさせることが大切です。

4　周囲の生徒への支援

発達障がい等のある生徒のいろいろな言動で、周りの人が悩んでしまうことあります。このような言動の原因としては、生徒本人の努力だけでは解決できない困難さ（特性）が深く関係していることがあります。
問題の改善を図るには、周りの人が発達障がいについて知ることが必要です。

周囲の生徒がとまどいを感じていたら・・・

○　発達障がいのある生徒にどのように接したらよいか分からず悩んでいる生徒もいる。
○　対応の仕方が分からず、からかいやいじめに発展することも少なくない。

困難さを感じながら一緒に生活している生徒がいるのだから．．．

周囲の生徒への支援のポイント

○　発達障がいについて説明するだけではなく、「誰にでも得意・不得意がある」ことや、障がいの有無に関わらず「一人一人の存在を大切にする」ことの大切さなどについて、生徒と一緒に考える場を設ける。

・　周囲の生徒たちの接し方がうまくいった時には、「今のあなたの、その言葉のおかげで○○さんは△△ができたんだよ。」などと、さりげなくほめるのもよい方法です。

○　互いの違いを「個性」として認め合うことの大切さを教える。

・　日常でも自然に「ありがとう」「よろしく」などの言葉を交わせる集団づくりに心がけましょう。一人一人が認め合い、温かい言葉をかけあうことのできる集団の中では、生徒は安心感が得られ、互いの信頼感が生まれます。「誰でも困っていれば助けてもらえる」という感覚は、自分の存在感を高めることにもなるのでとても大切です。

○　周りの生徒の不満や正直な気持ちを表出させる機会を設けることも大切である。

・　周囲の生徒たちが力を発揮しやすいように支えることも、教師としての大切な役割です。特に、学年や学校の行事への取組において、生徒たちは大きな力を発揮してくれることが多いものです。こうした機会に、いろいろな立場の生徒が行動しやすいように教師が支えることです。

一番苦しみ悩んでいるのは、生徒自身です。生徒の立場に立ち、「どんなことにつまずいているのか」「なぜ、問題行動が起きたのか」など考えることが、発達障がいについて知ることの第一歩です。

5　進路選択に向けた支援

進路選択は、どの生徒にとっても重要な問題です。ここでは進路を選択する上で大切なポイントをまとめました。発達障がいのある生徒に対しては、特にきめ細かに支援していくことが大切です。

将来の自分の姿を具体的に描かせることが大切

そのためには、

- ○　進路（希望する高校や職業）が自分の特性に合っているのか。
- ○　描いた姿に近づくためには何が必要か。
- ○　希望する進路に向けて、今、自分にできることは何か。

などを考えさせていく必要がある。

在学中の指導については、中学校卒業後の学校生活や社会生活において必要とされる力を身に付けさせような支援計画を立てることが大事

進路支援のポイント

○　自己理解（気付き）を促す。

- 自分の長所・短所、興味・関心、学力、性格、適性などを客観的に理解させる。
- 自分の適性に合った進路を調べさせる。
- 今の学習内容等が、将来希望する職種や進路先と、どのように関連しているか考えさせる。

○　ソーシャルスキルトレーニングを行う。

- 進路先の学校生活に適応できるよう、必要なスキルについて理解させる。
- 社会のルール、場や相手の状況に応じた会話・行動・態度について理解させる。
- 就労には様々なスキル（挨拶や報告・連絡・相談・質問等）が必要なことを理解させる。

○　社会体験を推進する。

- 職場体験や、ボランティア活動などをとおして、就労や社会生活について理解を深めさせる。

○　自己決定の必要性を自覚させる。

- 教師や保護者は情報や知識を伝えるよき相談相手役になり、進路は自分で考えさせる。
- 進路だけでなく、普段から本人の意思を尊重し、「自分で決めた」ことに対しての努力を認めるようにする。

社会性を身に付けさせるとともに、生徒が自分自身の苦手な部分とその克服方法を知っていることは、大きな強みになります。

6　部活動のための支援

中学生にとって部活動は、学校生活の中でも大きな割合を占めます。障がいのある生徒が目的をもって部活動に参加できるようきめ細かな支援をしていくことが大切です。

活動の中での自分のなりたい姿を描かせることが大切

そのためには、
- ○　選択した部活動中で自分が生き生きと活動している姿。
- ○　描いた姿に近づくためにはどのように活動していくことが必要か。
- ○　高校生として今できることは何か。

などを考えさせていく必要がある。

本人が自身の特性と上手に付き合いながら部活動を継続していくことができるような支援について考えることが大事

部活動支援のポイント

○　目標を持たせる。
- ・　部活動において自分がしたいこと、できることは何か、顧問の先生や友達と相談しながら自分の目標を決めさせる。
- ・　部活動内のルールや校外の状況に応じた行動・態度についてカード等を用いて理解させる
- ・　本人の意思を尊重し、「自分で決めた」ことに対しての努力を認めるようにする。

○　困難にぶつかった時の支援方法を決めておく。
- ・　部活動をする中で、本人が困った時に相談できる相手を決めておくことで、安心して部活動に参加できるような体制を準備しておく。
- ・　勝ち負けを受け入れることができるように、適切な行動の仕方についてせりふ等で示しておく。
- ・　友達とのけんかやトラブルで興奮している時は、気持ちを落ち着かせる場所と時間を用意する。

○　周囲の人達の理解を得ることができるような体制を整える。
- ・　本人の特性について友達や保護者に理解してもらうためのキーパーソンを決め、状況に応じて支援を得ることができる体制を整えておく。

障がいのある生徒全てに同じような配慮が必要なのではなく、一人一人の特性や状況により、障がいのある生徒もない生徒も生き生きと部活動に取り組むことができる体制を整えることが大切です。

部活動に参加することで、社会性を身に付けさせるとともに、生徒が自分自身の苦手な部分とその克服方法を知ることは、大きな強みになります。

7　家庭学習のための支援

家庭学習は、どの生徒にとっても重要な問題ですが、発達障がいのある生徒に対しては、特性に応じたきめ細かな配慮をしていくことが大切です。

自分の状況に応じて段階的な目標を立てることが大切

そのためには、
- ○　課題をすることの意義について。
- ○　今できることはどこまでか。
- ○　段階ごとに目標を変更していくこと。

などを考えさせていく必要がある。

家庭学習に取り組むまでの困難さにも配慮することが大事

家庭学習のポイント

○　課題の中で何に取り組むのか自己決定を促す。
- ・　できることとできそうにないことについて客観的に考えさせる。
- ・　課題にどのように取り組むか（内容や量）、教科担任と相談する。
- ・　相談の結果から、何にどのように取り組むのか自己決定させることで、課題に取り組もうとする意欲を高める。
- ・　家庭学習用のチェックリストを作って、学校と本人、保護者が協力して取り組む体制を整える。

○　各教科担任との日常からの連携を行う。
- ・　各教科の課題については、日常的に相談できる体制を整備しておく。
- ・　教科の課題が重なった時には、教科間の調整の必要性が出てくることを予想して、調整の仕方についてあらかじめ準備しておく。

○　できたことへの賞賛を行う。
- ・　「自分で決めた」ことに対しての努力を認めるようにするとともに、自己評価をさせることで自信の獲得に結びつける。
- ・　継続の大切さと段階ごとに目標を変更していくことの大切さのバランスを考えながら助言を行う。

「他の生徒は課題をやってくるのに」「やる気がないのか」などの叱責よりも、できることは何かを一緒に考え、生徒の努力をほめ、本人の意欲を高めていくことで、自信につなげていくことが大切です。

9　ワンポイントアドバイス

アドバイス①

１３ページ～３１ページに記載されている具体的な支援方法や対応のポイント、支援のポイントは、すべての生徒に対応できる方法ではないことに留意してください。

生徒個々の障がい特性を理解し、実際に困っていることを把握し、その背景をしっかりとらえ、チームで支援の方法を検討していくことが大切です。

アドバイス②

指導場面や日常会話の中から、発達障がい等のある生徒との会話の工夫例（効果的な発言）を挙げてみました。

×「よそ見をしないように。」
　→　○「先生の方を見なさい。」

×「あの子の気持ちを考えてごらん！」
　→　○「◇◇さんがいやだと言っているよ。」

×「何だ、その格好は！」
　→　○「シャツのすそをズボンの中に入れなさい。」

×「今、何をする時間かな？」
　→　○「今は、△△する時間だよ。」

×「うるさくしていいのかなあ？」
　→　○「静かにしよう。」

×「早くやってしまおう。」
　→　○「何時何分までにやろう。」